
またいつか一緒に【第 1 3 話】

聖魔光闇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

またいつか一緒に【第13話】

【Nコード】

N5466V

【作者名】

聖魔光闇

【あらすじ】

修学旅行の帰り、僕は列車事故に遭い、右腕と両足の自由を失った。そんな僕を遠ざけていく仲間。僕は代行業者を使い、仲間への復讐を開始する。だが復讐を目の当たりにし動揺し迷いが生じる。過去の暴行事件で浮かび上がった男の存在、事故で死んだ椎名の謎：そして僕の彼女の遥に何が…？ 遥の部屋で死んでいた椎名らしき人物。その死体に驚愕していると、背後を来栖が通り過ぎようとした。

(前書き)

今回は、設定事項を用意しました。以下の内容に添って、執筆お願いいたします。

リレー小説(第二弾) 設定・注意事項

★全40話

★一話2000文字以上

★登場人物数制限なし

★ファンタジー要素無し

★SF要素無し

★地の文は主人公視点

★重複執筆可

★ジャンルはその他

★執筆予約制廃止(予約を入れてくださる著者様を拒みはしませんが、ある程度の執筆予約が入ってから執筆開始はしません。執筆予約を入られた著者様に関しては、活動報告に掲示させていただきます)

★執筆著者様は、執筆前にご連絡ください

★執筆投稿後、必ず御一報ください

★あらすじは、前話までの要約を明記

★全ての物語を聖魔光闇がお気に入り登録します

★後書きに執筆著者様募集広告を添付

一話…聖魔光闇 <http://ncode.syosetu.com/n1590t/>

二話…日下部良介先生 <http://ncode.syosetu.com/n1590t/>

tu.com/n2296t/
三話..ふえにもしる先生 http://ncode.syosetu.com/n3991t/
四話..koyak http://ncode.syosetu.com/n4630t/
五話..創離先生 http://ncode.syosetu.com/n8318t/
六話..蟻塚つかちゃん先生 http://ncode.syosetu.com/n9612t/
七話..聖魔光闇 http://ncode.syosetu.com/n1100u/
八話..伝次郎先生 http://ncode.syosetu.com/n2759u/
九話..koyak先生 http://ncode.syosetu.com/n4425u/
十話..このはな さくら先生 http://ncode.syosetu.com/n4766u/
十一話..鳩麦先生 http://ncode.syosetu.com/n8057u/
十二話..ポテトバサー先生 http://ncode.syosetu.com/n1332v/
十三話..聖魔光闇

よろしくお願い致します。

「うわああああ！！ 頼む！ 助けてくれ！ 殺さないでくれ！」

来栖は振り向き様にひざまづくと、両手を合わせ、涙を流しながら懇願している。

そんな来栖に声を掛けた勝俊も、そして後ろで見ていた僕も黒崎さんも、その光景に一瞬凍り付いた。なぜなら、来栖の合わせた両手には、指が無かったからだ……。

「どうした来栖！ 何があった!？」

初めに動いたのは勝俊だった。勝俊は、来栖の傍に駆け寄ると、血を流し続ける両手を自分のシャツで包むと、出来るだけ強く縛り付けた。

『僕の時、恐がるだけで知らん顔だったくせによ!』

そんな僕の思いも知らずに、勝俊は来栖に声を掛け続けている。

「勝……俊……？ 智哉も……、どうしてここに……」

ようやく正気を取り戻したのか、来栖が顔をあげて、驚いている。その瞬間、ガクツと来栖の身体が崩れると、そのまま床に倒れ込んだ。

「救急車!!」

「はい、既に手配致しております。しかし、ここでよろしかったですか？ あの方の事もありますので、後々面倒な事にならないければ良いのですが……」

必死の形相の勝俊に比べ、黒崎さんは淡々と話をする。あの方というのは、きっと椎名の事だろう。

それから暫くして救急車がやって来ると、勝俊が来栖に同乗して病院へと向かっていった。

救急隊の人が、警察に通報し、僕と黒崎さんは、簡単な事情聴取

を受けたが、すぐに釈放され、黒崎さんの車で家まで送って貰った。

『おかしい。最近の連日の事件から考えると、聴取が簡素すぎる。しかも、殺人現場にいた人間に対して……。警察は、一連の事件に関与していないのか？ それとも、別の……。』

部屋に入ると、暗い部屋の中で、仄かに光るPCにメールが届いていた。

《今回の復讐劇、如何であったでございましょうか？ 目の当たりにするのも、一興でございましょう。さて、残すは一応、あと一名となりました。それでは、お返事お待ちしております》

『一応……。どうして一応なんだ……。それに勝俊は、一度あの別荘で……。それにあの部屋には、他に誰もいなかった筈だけど……。』
腑に落ちない点ではあったが、メールの返信をしてから、携帯の画面を見た。

『遙！』

そうだ遙だ！ あの部屋は、遙の部屋の筈なのに、椎名が死んでいた。しかも、どうして来栖が居たんだ。遙は何処へ行ったんだ。わからない事が、頭の中でぐるぐると渦巻いていたが、ひとまず遙へ連絡が出来ればと、携帯のアドレスの中から遙を探し、通話ボタンを押す。

『繋がるわけねえか……。』

そんな思いを余所に、呆気なく遙の声が聞こえてきた。

「もしもし。どうしたの？ 智哉君」

「遙！ 今何処だ！？」

「智哉君どうしたの？ 何かあったの？」

「詳しくは会って話す！ 今何処にいるか教えてくれ！」

「今？ 病院だよ。中央病院。親戚のおばさんがね、倒れたって連絡があつて、病院に来てるの」

「そうか、わかった。じゃあ、すぐに行くからな！ そこ、動くんじゃねえぞ！」

何か嫌な予感がする。しかし、今はそんな詮索をしている場合で

はない。僕は、すぐさま勝俊に電話を掛けた。

「勝俊、今何処だ？ 黒崎さんに来て貰えねえか？」

「病院だよ。来栖が今、治療中だ。黒崎さん？ いいよ。連絡してく」

「病院って……、何処の病院だ！」

勝手に心拍数が上昇していく。

「何処って、ここは……中央病院だな」

「中央病院！？」

「どうしたんだよ智哉！ 何かあったのか！？」

「勝俊！ 頼む！ 黒崎さんを迎えに遣してくれ！ 俺も今からそこへ行く！ 早く！ 出来るだけ早く頼む！」

僕は勝俊の返事も待たず、通話を終了した。

『どういう事だ？ 部屋にいた筈の遥が、中央病院にいる。来栖の運ばれたのも、中央病院。どうして遥の部屋で椎名は、死んでいた……。どうして、あの部屋に来栖がいた……。いや、そもそも、どうして来栖があの部屋に……。来栖のあの手は、どうしたんだ……。あの受話器越しに聞こえた、何かが碎ける様な音……。あの女の声……。二度死んだ椎名……。いしやさくな……。』

「クソッ！ もうどうなっているのか、わけがわからねえ！」

思考を廻らせていたが、思わず大声を出してしまった。その時、家の前に車が止まる音が聞こえた。

その後、僕は黒崎さんに抱えられ車に乗ると、中央病院へと急いだ。黒崎さんは、始終無表情で、顔色一つ変えず運転していたが、その表情をルームミラーから、ずっと眺めていた僕は、不信感を募らせていた。

病院の駐車場に車を入れ、黒崎さんと共に病院内へ入ろうとしたが、既に夜間診療の時間になっており、正面口が閉鎖されていた為、救急専用口より病院内へ入る。そしてすぐに、僕は近くにいた看護

師に声を掛けた。

「すみません。この人、この後、用事があるそうなので、押してくれませんか？」

「あら、そうなのですか？ わかりました」

何か言いたそうな黒崎さんを残して、ひとまず居場所が確定している来栖の下へ急ぐ。

勝俊は、救急治療室の前のベンチに座り、両手を握り合わせたまま、目の前の床を睨み続けていた。

「勝俊！ 来栖はどうだ！？」

「智哉！ あれ？ 黒崎さんは？」

「ああ、黒崎さんね……。何か、用事があるらしく、先に帰った」

「そうか、用事か……。じゃあ、仕方ねえな……。で、何か慌てていたみたいだけど、何かあったのか？」

「実は……、遥が……」

家に帰ってから考えた事を、かい摘まんで説明する。まあ、言いたくても、全てを話す事は出来ないんだが……。

「で、若宮は無事なんだな！？」

一瞬、勝俊の顔が明るくなったような気がした。

「いや、まだ会ってねえ」

「どうしてだよ！？ 会ってこいよ！ 来栖には、俺がついているからよ！」

「あ、ああ……。わかった。じゃあ、また後でな……」

そう言って僕は促されるまま、いつの間にか入れ代わっていた、受付の制服姿の女の人に押ししてもらいながら、薄暗くなった病院の廊下を進んで行った。

振り返ると、勝俊が陰しい表情で、去り行く僕の後ろ姿を睨んでいた。

（後書き）

これはリレー小説です。

リレー小説とは、複数の筆者による合同執筆（合作）を言います。御参加頂ける方は 聖魔光闇先生までメッセージにて、ご一報ください。

参加していただける方は、再度メッセージにて、正式に依頼させていただきます。

その後、投稿後にもう一度ご連絡いただきますよう、お願いいたします。

現在、17話以降の執筆担当著者様を、募集しております。皆様のご参加、心よりお待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5466v/>

またいつか一緒に【第13話】

2011年8月7日03時26分発行